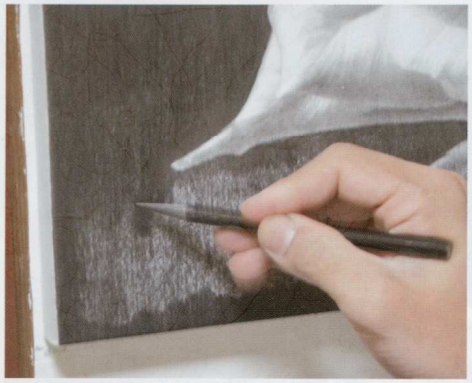
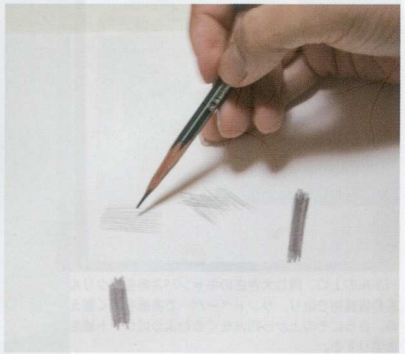
POINT 背景の漆黒は長めのストロークが作り出す

描画をする際に使用している鉛筆は4Hから2Bまでです。背景には9Bを使いますが、3Bから8Bまでの間に関してはほとんど使いません。9Bはファーバー・カステルのグラファイト・ピュアを使っています。この鉛筆には通常の鉛筆のような木軸はなく、すべてが黒鉛で出来ています。背景はモチーフが浮かび上がるように長めのストロークで強く縦方向だけに線を重ねていきます。こうして描いていくうちに、紙の下に敷いたキャンバスの布目が、自分でも思いがけない表情を見せてくれることがあります。



長めのストロークで背景を描いていく。かなりの回数、線を重ねることで、背景があたかも漆黒のような様子を呈してくる。

背景を描くのに使用しているのはファーバー・カステルのグラファイト・ピュアの9B。通常の鉛筆は黒鉛を木軸で包んでいるが、この鉛筆は木軸がなく、全てが黒煙でできている。



鉛筆での描画は線を重ねていくことが中心となる。隙間を空けずに線を重ねると濃くなり、隙間を空けるように線を重ねると背後の紙の地色が見えて、柔らかく明るい面になる。

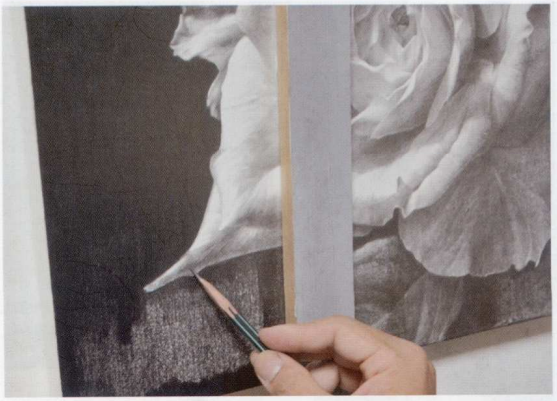
肉眼で見えないもの

制作には自身が撮影した写真が使用される。これは水滴の波紋を撮ったもの。

ロラン・バルトの著書『明るい部屋』のなかで、バルトは年老いて亡くなった母親の少女の頃の写真を見て、それが母親の本質・真実だと確信した、と言っています。たとえば左の写真は波紋をカメラで撮影したものですが、肉眼ではけしてこのように見ることはできません。でも、人が見たものだけが全てではなくて、ここにある水滴の波紋も一つの真実の姿だと思うのです。

POINT 足すことで調整する

花びらの部分はその繊維に沿うように方向を考えながら線を引いていく。



鉛筆の持ち方によっても力の入れ具合が変わり、線の濃さや勢いに微妙な変化を付けることができる。

画面の中でもっとも明るい部分、花びらのハイライトの部分は、本来の紙の白色がそのまま残っている。

花びらのような明るい部分は、4Hから2Bまでの鉛筆で濃淡を考えながら描いていきます。この時は、背景のように縦一方向に線を引くのではなく、柔らかい花びらの質感が出るように線を重ねていきます。線の方向も、花びらの丸みに沿うような形で細かく引いていきます。

基本的には鉛筆で描くだけで、消しゴムなどで消すことはほとんどありません。ハイライトとして消しゴムで消すという描き方もありますが、私の場合は明るい部分が他よりも暗くなってしまった場合には、他をさらに暗くするようにどんどん足して調整していきます。そのほうが描きたいものに近づいていくと思っていますから。とはいえ鉛筆の透明感を生かした描き方なので、そこまで暗くなってしまうということはほとんどありません。

【やすとみ・ひろき】1978年香川県生まれ。京都造形芸術大学大学院修士課程（洋画）修了。高松天満屋、奈義町現代美術館、イムラアートギャラリー等個展。京展2002市長賞、京都造形芸大院生展大学院長賞、損保ジャパン美術財団選抜奨励展秀作賞ほか受賞。現在京都造形芸大非常勤講師。

Info ●エトワールブリヤント展（画廊大千にて10月24日～11月4日）、個展（新宿髙島屋にて2012年2月）

『美術の窓』 2011年10月号
特集「黒を使いこなす マル秘技法講座vol.23」